
歪んだ僕と……

朴念仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪んだ僕と……

【Nコード】

N7682U

【作者名】

朴念仁

【あらすじ】

とある理由で一年間の不登校生活を送った僕と、それを取り巻く世界の話。これは、僕が僕で在るために起こってしまった事件。歪んだ僕と、一途な彼女たちによる、荒唐無稽で、とても不思議な、曲がりなり曲がった、物語。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

ちゃんと書けてるか心配です（汗）

ブローグ

さとむらせかい
里村世界と呼ばれる女生徒について僕が知っていることは、ほんの僅かなことでしかない。

曰く、成績優秀、容姿端麗、八方美人の三拍子が揃っているとのこと。僕は元々一年生のころ不登校だったせいで彼女と関わることは他の生徒と比べてあまりにも少なかっただろうが、しかし、それにしても、そんな僕の耳にも届くほどの評判なのだから、彼女——里村世界はとてつもなく有名だったと言えるだろう。

クラス内で、情報を収集するためのグループを持たない僕が、ただクラスに存在しているだけで得ることができた情報は一つ。彼女は何かしら、人とはある程度の距離を置いている、という事だ。それは、端から見れば一目瞭然だと言えるだろう。

決して自分から話そうとはせず、他人に話しかけられても相手に不快感を与えないように振る舞い、自分の意思を出すこともなく、ただただ一人で愛想笑いを浮かべている。まるで自分を隠すかのように、相手の顔を窺いながらクラスメートと話している姿は、改めてみると随分不気味なものに見えてくる。

いや、不気味というか不思議なのだろうか。

普通、人間は同じグループの人間に対して、徐々にだが自分を解ってもらおうとするものだが、彼女は全くと言っていいほど真逆なのである。

他人に自分を解って欲しくない。

他人から理解などされたくもない。

私は、私で。

あなたは、あなただ。

まるでそう言っているかのように、自分以外の他人に対しては壁を作り、その壁の中に自分自身の世界を作り、独りでずっと閉じこもっている。故に僕は——いや、僕たちは、本当の彼女についてはまったく言っていないほど、これっぽっちも、露ほども、理解していないのである。

まあ、一つ言えることはそれが里村世界と言うことなのだろう。他人を理解しようとしらない事こそが本当の意味で、里村世界らしさなのだろう。

人間らしくない、彼女らしさなのだろう。

実際、僕も他人のことなんて理解できないと思っている側の人間だ。どれだけ言葉を交わそうとも、どれだけ長い年月が経とうとも、自分以外の人間のことなんて、決して理解することはできない。人それぞれだと思うが、自分のことさえ理解できない僕は、おそらく一生かけても誰かを理解することなんて叶わないのだろう。

里村世界のように、他人を理解しない訳ではないが、僕は他人に對してあまり興味が持てないのだ。皆が同じように動く世界。どこを見渡しても、同じような人間が、同じような動きをしている様しか見えないのだから、興味を持てなくても仕方がない。

かく云う僕自身は、他とは変わっている人間らしい。確かに、一年間不登校だったり、周りに友達がいらない時点で変わり者と思われ

ても、おかしくはないだろう。

本当に、我ながら歪んでいる。

さて、なぜこんな僕が、里村世界という人間に対してこれほどまでのプロファイリングをしているのかというと、結論から言えば——いや、結論から言わなくとも、興味を持ってしまったからだ。

里村世界に対して、関心を抱いてしまったからだ。

もちろん、それには理由がある。どうしようもないほどの理由がある。

それは、僕が永きに渡る、苦痛のような一年間の不登校生活を終えて、久しぶりに、何ヶ月ぶりに学校に登校した日——というか今日のことである。これまで、時間に追われることのない生活をしていたせいなのか、もしくは元来そういう性分なのか、その日、僕は遅刻ギリギリの時間帯に、学校に向けて全速力で走っていた。

その途中、僕は見てしまった。

見てはいけないものを、見てしまった。

学校からはそう遠くない場所。しかし、決して人目が見つからないような、人の目からは死角になるような、そんな場所。そこへ目が動いてしまったのは今から思うと、必然的なものだったのかもしれないし、単に偶然だったのかもしれない。

ともかく、僕はそこである人物を視界に捉えた。その場に存在するのが最も不釣り合いで、不相応で、不適応な人物を、しかしはつきりと、僕の目は捉えていた。

まるで、その場には自分しかないかのように。
まるで、その世界に一人だけ取り残されたかのように。
彼女は一人、佇んでいた。

そして、彼女は一人で笑っていた。

これ以上なくらい楽しそうに、とても愉快に、心底うれしそうに、いつもの愛想笑いとは明らかに違う、本心の笑みを顔に浮かべて、彼女——里村世界は笑っていた。

——その手に、血に濡れたナイフを持って。

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

評価してくれると嬉しいです。

好評だったら続きを書きたいと思います。

痛覚依存？

『古稀^{ふるき} 縁君^{よすが}へ——今日の放課後、六時に屋上へ来て下さい。伝えたいことがあります。』

そんな、ラブレターじみた手紙を僕が見つけたのは、学校が終わり、外靴に履き替えようと靴箱を開けた時のことだった。差出人の名前はないが、誰から宛てられたものなのかは容易に想像できる——おそらく、いや間違いなく、里村世界だろう。

ちょうどこれから、今朝、彼女を見つけた場所に行こうと思っていたし、彼女とは少し話をしたかったので、僕にとって、この手紙は寧ろ好都合だったと言えるだろう。

あの場所は、この学校からはさほど遠くない場所にあるが、普段は誰も立ち寄らない場所なので、人が多いこの時間帯にそんな場所に入っていくのを見られてもしたら、怪しまれるに違いない。

僕が通っているこの高校——私立上ヶ丘高校は、世間から言うところの、いわゆる名門進学校と言える部類なのである。大学受験に力を入れた授業方針と教師による徹底されたカリキュラムが有名で、保護者からの評判も良い。よって、必然的にこの学校に通う生徒たちは一般的に、まじめな優等生であることが多い。しかしその反面、不真面目な生徒には、当然というか悪い噂が立ちやすい。

だからこそ、僕みたいな例外的な生徒——例えば、一年間まともに授業に出なかったような生徒は稀でいて、希少な存在なのだ。一応、弁解はしておくが僕だって根はまじめである（あくまで、まじ

めなのは根だけであって、茎とか葉、ましてや花がどうなっているのかは想像したくもないが）。あることが原因で不登校にさえならなければ、表向きはいたって普通の生徒だったはずだ。

まあ実際、いくら振り返ろうとも過去は過去なのだから、これ以上は言い逃れようとは思わないが、しかし、今からしてみても、昔のまじめだった僕をここまで歪ませたのだから、一年前のあの出来事はどれだけ軽視しようにもしきれない部分が、やはりあるのだろう。

「あれ、古稀君。もしかして、ラブレターもらったの？」

そんな、どうしようもないことに考えを巡らしていると、不意に背後から声をかけられたことに気がつく。

「違うよ。これは何というか……ラブレターと言うよりも、どっちかというところたし状に近いニュアンスだと思う」

後ろから投げかけられた的外れな質問に、適当に答えながら振り返ると、予想どおり、目の前には、辰宮楔が興味津々といった様子で、僕の持つ手紙を覗き込んでいた。

たつみや
辰宮 楔。

僕のクラスメートであり、そして同時に、僕にとって唯一の友達だ。……いや、過言とかじゃなく、本当に。

辰宮楔を一言で表すとするならば、それはきつと、『優等生』に違いないだろう。名門の割には、さほどルールに対して厳しくないこの学校においても、それをしっかりと守っているのは、おそらく

彼女ぐらいだろう。

髪の毛を、校則に倣って肩にかかる程度まで伸ばし、それを後ろで一つに纏めているが、ポニーテールというよりかは、サイドポニーに近い髪型をしている。制服を着崩すこともなく、いかにも生徒手帳の見本どおり、みたいな格好をしているその姿は、どこからどう見ても模範的な生徒といえるだろう。

もちろん、実際に教師からの受けもよく、成績も、あの里村世界と肩を並べるほどの、いや、もしかしたらそれ以上の学力の持ち主である。

一年間も学校に顔を出さなかった僕に対して、距離を置くことなく、どこるか普通に接してくれたのは、クラス内でも、そんな誰にでも優しい辰宮をおいて他にはいないだろう。本当に、爪の垢を煎じて飲まして欲しいくらいだ。

「なあ、辰宮。里村ってどんなヤツなんだ？」

「里村さん？ 別に、変わった所もない普通の優等生だよ。って、もしかしてその手紙、里村さんからなの！？」

騒いでいる辰宮は放っておくとして、それよりも、普通の優等生か。普通じゃない劣等生の僕からしたら、あまりにも遠い存在だな。さすがはクラスの人気者、いや、学年の人気者だけのことはある。しかし、僕が聞きたいのは、そういうことではない。

「えーと、そうじゃなくってさ。僕が聞きたいのは他人からの評価とかじゃなくて、辰宮から見た里村世界がどんな人間か、ってことだ」

辰宮楔を紹介するにおいて、省いてはならない情報が一つある。それは、彼女が他人とは比較にならないほどの、とてつもない、観察眼の持ち主ということだ。これこそが、彼女が里村と並ぶほどの秀才と呼ばれている所以なのだと、僕は密かに思っている。

そんな辰宮から得られる、里村世界の性格を僕は知りたいのだ。

「ああ、そういうことか。えーっとね、古稀君なら分かっていると
は思うけど、里村さんは他人に対してあまり、というか全く心を許
してないんだよね」

「うん。それは、僕も何となくは分かった」

「えらい、えらい、さすが古稀君。やっぱり私が見込んだだけの
ことはあるね」

そう言いながら、辰宮は、まるで子供を褒めるかのように、僕の
頭を撫でている。正直言つて、これには相当恥ずかしいものがある
のだが、これを拒むとなぜか辰宮の機嫌が悪くなるので、僕はいつ
も大人しく、されるがままに頭を撫でられている。

そして、ひとしきり頭を撫で続けて、僕から手を離れた後、辰宮
は少し深刻そうな顔をしながら次の言葉を続ける。

「……里村さんはね、とても繊細な娘なんだ。自分が傷つくのが
嫌いで、同時に相手を傷つけることも同じくらい嫌いなんだと思う。
だからこそ、他人とできるだけ関わらないようにして、必要最低限
のことでしか人とは話さないようにしているの。古稀君は一年生の
とき学校を休みがちだったから知らないとは思っけど、元々、里村

さんはあんな娘じゃなかったんだよ。愛想笑いなんかせずに、ちゃんと笑ってたし、嫌なことは、はっきりと嫌って言える人だったんだけどね……。確か去年の秋ぐらいに、お家の方で何かトラブルがあったらしくて、それが原因であんな風になっただけなんだって。私もそこまで詳しくは知らないけど、私が里村さんの変化に気づいたのもそれぐらいの時期だったから、それが原因で間違いないと思う」

昔は——一年生の時は普通だったのか。

僕からしてみれば、今年初めて知り合ったといっても過言ではないから、常日頃から、あのような態度がとられているのだと思っていたが、やはり、一年間の付き合いがある辰宮にとっては、そうではなかったらしい。

僕の知らない里村世界。

僕が知る前の里村世界。

そのときの彼女は、一体、どんな人間だったのだろうか。

「これが私の知ってる里村さんの全てかな」

そうして、そこまで言い終えると、辰宮は少し疲れたように一つため息をついた。そういえばこの前、他人のことは、あまり自分勝手にベラベラと話したくないって言ってたっけ。

「ごめんな、辰宮。なんか無理させちゃって……」

「ううん、平気。何だか古稀君、すごく真剣な表情してたし、そ

の力になればなあ、って思ってたことだから、私のことは気にしない。それと、これはあくまで私個人の意見だから鵜呑みにしちゃダメだよ」

「ああ、分かってるよ。ほんと、お前の優しさには日々感謝させられるよ」

「別に、私は優しくなんかないよ」

そうして、謙遜する辰宮に礼を言いながら、僕はもう一度校舎に戻るために上履きを履きなおした。約束の時間までには、まだ少し余裕があるが遅れていくよりは幾分マシだろう。それに、ゆつくりと屋上まで歩けばいいだけのことだ。色々考えることもできたし。

「ねえ、古稀君。結局誰に会いに行つて、何をするつもりなの？」

僕が再び校舎に戻ろうとするときに、最後の確認をするかのように辰宮が尋ねてきた。

「誰に会ったのは、お前の予想通り里村だよ。それで、何をするつもりなのかは、正直言つて僕自身もまだ分からないかな、里村に何をされるかも分からないし……」

「そうなんだ。まあ、何はともあれ頑張つてね。きっと古稀君なら何でもできると思うよ」

「今日は、色々ありがとな。じゃあ、また明日」

そう言つて僕は、辰宮に手を振りながら別れを告げた。

そうして現在、僕は屋上へと続く階段を上っている。

しかしまあ、何というか、待ち合わせ場所を屋上に設定するなんて、今時にしてはベタな展開である。そもそも屋上なんてものは、どの学校でも普通は閉じられていて、外に出ることすら叶わない状況が多いというのに、里村はそのところ、一体、どういうつもりなのだろうか。案外、漫画やアニメだと友好的で、有効的に使われている場所だが、実際、そこを待ち合わせにするにはどうだろう、なかなか不便なものを感じてならない。まず今現在、そうであるように、屋上までの階段を上するという行為が、とてつもなく無駄に思えて仕方がないのは、はたして、僕だけなのだろうか。学校の下駄箱から屋上までって、校舎内での一番の体力を使うルートだと思うのだけれど……

時間もかかるし、労力もかかる。

漫画の世界は、現実に見ればシビアなことが多いのかもしれない。

閑話休題。

そんな無駄な時間を有意義に使うために、僕はさっき聞いた辰宮の話——里村がまじめだった頃の話进行思い出していた。

辰宮の話によると、家庭内の事情で今のようになつたと言つてたけれど、はたして一体、何が起これば、あんなことをするような性格に、様変わりするのだろうか。

あんなこと——今朝のあの一件のことだ。あの時は、僕の位置からでは少し遠くて、あまりよく見えなかつただけけれど、それでも手にしているナイフだけは、やたら異様なほどに目に焼きついている。

結局、あれは何をしていたのだろうか。他人のことについて詮索することは、あまり良くないことだと分かつてはいるが、どうも氣になつて仕方がない。それに、その行動が、精神的な面での問題が原因で引き起こっているととなると、なおさら、心配になつてくる。

人間、肉体的な傷は放つておいても回復するけれども、精神的な傷は放つておくと、回復するよりも、むしろ、広がっていくだろう。よく世間では、そういう傷は時間が治してくれるといわれているが、僕はそうは思わない。

時間は、傷を、腐らせる。

治療しても残る傷があるというのに、それを放置しておけば治るという発想は、どうにも僕には理解しがたいことだ。時間が経てば癒される、時間が傷を治してくれる、こんな言葉は傷ついたこと自体を忘れようとしているだけで、ただ単に、問題を先延ばしにして

いるに他ならない。

一度心に傷がついたなら、それを一生背負い続けなければいけないのに、忘れることなんてできやしないのに。だからこそ、そうやって問題を先送りにした人達には心的外傷——トラウマなんてものが残ったりするんだ。傷を治さないから、傷が治らないから、痕ができる。そうして腐った傷は、取り除いて、見えない振りをする。つらい現実から逃げるために、目を背ける。

僕が身に沁みて得た、いや、身を腐らせて得た教訓だ。

ほんと、歪んでやがる。

しかし、別に逃げるのが完全に悪い、と言っているわけではない。あくまで僕の教訓だ。他人に強いるつもりも、ましてや、それを真実だと思って欲しいわけでもない。ただ、僕がそうであっただけ。本当に何の他意もなく、ただそれだけだ。

「ふう、やっと着いたか……」

ようやく屋上までたどり着いた僕は、そこで一息つく。普段、運動も何もやっていない僕にとって、下駄箱から屋上までのウォーキングというのは意外に疲れるらしい。一年間のブランクもあるのかもしれないが、それにしただって、以前と比べてみると明らかに体力が激減しているだろう。

さて、ここまで来たのはいいが、はたして屋上への扉は本当に開いているのだろうか。まさかとは思うが、これで扉が閉まっているなんて事があつたらどうしよう……。というか、一般生徒が屋上の鍵を教師から貰い受けることは可能なのだろうか。

とりあえず、開けてみないわけには一向に進めない。まあ、閉まっていたらそのときは、そのときだ。里村をここで待てばいいだけの話。

「……………」

そうして、僕はドアノブに手をかけて、ゆっくりと扉を押し開け

……

ガチャン！

そこで、扉は閉まってしまった。

「

……………え、嘘だろ」

さすがにそれはシビアすぎるぜ、現実さん。

ドアノブに手をかけたままの体勢で固まること数分。やっとのことで我に返るが、少しばかりの虚しさが心に積もる。

予想以上であった。

予想外でもあった。

そもそも、こんな展開予想できるはずもなかった……。

なんだろう、この感覚。今まで経験したどんなことよりも虚しい気がする。正直、家に引きこもっていた時期でさえも、こんな気分にはならなかっただろう。さすが里村世界、常人の一步、いや二、三步は先をいく存在だ。

「つて、感心してる場合か！」

そこで僕は、やや自暴自棄になりながら屋上のドアを思いっきり、全体重をかけて、格闘家さながらの鮮やかなフォームで上段蹴りをお見舞いした。

その渾身の一撃は、憎き扉を正確に捉えて、ものの見事にそれを粉碎するかのごとく衝撃を放つ。実際、粉碎はしなかったものの、その八つ当たりが功を奏したというのか、閉まっていたはずの扉は、その衝撃に耐えられなかった為に、今では完全に開いている。

もしかすると、実際は鍵が開いていたのかもしれない。しかし、普段から使われていないせいで扉が錆び付いていたのか、それとも扉自体が軋んでいたのか、何にせよ押しても開かない状態だったことは確かなのだろう。それをあんな必要以上の力で蹴り破れば、開くのは必然の結果というわけだ。

「まったく、扉のくせに僕に盾つくからこんなことになるんだ。ふははははははは！」

無生物を相手にここまで本気になり、ある意味、至上最高と形容

してもいいほどの上段蹴りをきめて、高笑いしている高校生が、確かに、そこにはいた。きつと、僕ではないことを願いたいけれど……。

「盛り上がっているところ悪いのだけれど、鬱陶しいから黙ってくれないかしら。それに、時間に遅れておきながら、よくもまあ、随分と粹な登場をしてくれるものね。」

そんな冷たい言葉が聞こえてきた方向に目を向けると、そこには、やっぱりというか、里村世界が立っていた。これ以上ないくらいに冷たい目をして、普段の愛想笑いを顔に貼り付けることもなく、おそらく本当の姿でそこにいた。

「なにをボーっとしているの、話があると手紙に書いてあったでしょう。そんな所で突っ立ってないで、早くこっちに來たらどうなの」

「あ、ああ」

そう言われて僕は、多大なる恥ずかしさと、多少の不安を胸に抱えて里村が立っている場所——屋上の縁の辺りまで歩いていく。何を言われるのか分からないし、何をされるのかも分からないのだから、警戒することは十分必要だったけれども、そのときの僕は不覚にも、さっきのことが原因なのか、ほとんど、里村に対して注意することを忘れていたらしい。その後のことは言葉通り、あつという間といっても過言ではなかっただろう。

里村の下まで來たと思った瞬間に、気がつけば僕の片腕は捻り上げられ、その状態のまま屋上の縁ギリギリに立たされていた。

「——ッ!？」

咄嗟に声が出なかったのは腕の痛みと、この状況における恐怖を肌で実感したからだろう。体中に吹きすさぶ風が妙に生々しい。

この屋上には柵がないため、それゆえに、僕の体はいつ校舎から落下しても、おかしくはない状況に瀕している。頼りになるのは、片腕を捻り上げている里村しかないのだが、この場合、それも当てにはなるまい。それよりも、心なしか僕の体が少し前傾姿勢になっているのは、気のせいなのだろうか……。

しかし、そんな僕の心配はまったく無縁というように、里村は後ろから、僕の耳元で囁いた。

「それじゃあ、古稀君。私の話、聞いてくれるかしら？ 私のお願ひ、叶えてもらえるかしら？」

そう言っおねがいて里村は、僕に脅迫するのだった。

——あの時と同じように、楽しそうに、笑いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682u/>

歪んだ僕と.....

2011年10月9日01時42分発行